

総合的表現活動における学生の学び

岡本 拓子・今井 邦枝

What did Students Learned Through the Activities of Integrated Expression?

Hiroko OKAMOTO・Kunie IMAI

高崎健康福祉大学紀要 第16号 別刷

2017年3月

総合的表現活動における学生の学び

岡本 拓子・今井 邦枝

(受理日 2016年9月20日, 受稿日 2016年12月22日)

What did Students Learned Through the Activities of Integrated Expression?

Hiroko OKAMOTO・Kunie IMAI

(Received Sept. 20, 2016, Accepted Dec. 22, 2016)

Abstract

This dissertation attempts to show what students majoring in early childhood education and care learned through their activities of integrated expression. In these activities, the each group of students played a puppet show, a music drama, a shadow play, and a black light theater. They chose themselves the stories from picture books what children liked, discussed about what was the most appropriate medium of expression, wrote the script of the story, and made the stage set and tools what they need for their story. They did all themselves and shared their ideas through discussion.

After the activities, researchers conducted a questionnaire survey to students for what they learned through their activities.

The results of the questionnaire survey can be summarized as follows.

- 1) The students felt pleasure of express and learned importance of cooperating with fellow in addition to learn various way of expression.
- 2) They answered that teachers need to educate the children to raise their expression, to do that, it is necessary to tell them the pleasure of express, the importance of cooperating with fellow.
- 3) Many students recognized that their ability of expression had been improved after their activities of integrated expression.

キーワード：総合的表現活動 表現力 保育者養成

I はじめに

今日、学力低下のみならず、自己を表現する力や他者と協したり良好な関係を築いたりするためのコミュニケーション能力の低下が高等教育機関においても問題となっている中、保育者養成における表現の授業は、その力量形成に大きな役割を果たすことが期待されている。

「表現する力」とは、個々の技能的側面としての表現技術の習得を指すだけでなく、あらゆる五感を働かせながら人や周囲の環境と関わり、様々な刺激を受けて「感じ取る力」、また、その経験を言葉、音楽、造形、身体などのあらゆる表現媒体を通じて「他者に伝える力」ととらえることができる。

岡本(2013)は、OECDによる「コンピテンシーの定義と選択」(DeSeCo)における「キー・コンピテンシー」の3つのカテゴリー、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(個人と社会との相互関係)、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力(自己と他者との相互関係)、③自律的に行動する能力(個人の自律性と主体性)¹⁾や、PISA調査の評価の枠組みとなっている「主体的・創造的・協同的に取り組む態度」を育成することが、人間形成の基礎を培う乳幼児期の保育・教育に携わる保育者の養成においても重要かつ有効であること、そしてDeSeCoやPISA調査の評価の枠組みに示されるように、知識・技能を、問題解決や異質な集団における理解・交流などに「相互作用的にいかす力²⁾を育成するということは、保育者に求められる「表現力」を育てることと同じ意味であることとらえることができ、保育者養成における表現系教科目はその力量形成に貢献することが期待されていると述べている³⁾。

2011年度に改正された新保育士養成課程でも、学生の「表現する力」を育むために、言葉、音楽、造形、身体の4つの領域からなる「保育表現技術」の教科目が配置された。これは、「従来の『基礎技能』から、保育における表現に係る保育技術を学ぶ科目であることをより明確に示す」という観点から、「『表現』を広く捉え、子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動に結びつけたり、遊びを豊かに展開するために必要な技術を習得したりできるようにする」ことがそのねらいとされている⁴⁾。つまり、保育者養成における表現系教科目においては、単に学生の技能的側面を伸ばすといった目的にとどまらず、保育者となる学生自身の表現する力を育てるとともに、様々な表現を総合的にとらえる視点とそれを実際の保育にどうかしていくかといった実践力をも身につけることが求められているのである。

II 目的と方法

本研究では、現行保育士養成課程における各保育表現技術での学びを相互に関連づけ、保育者に必要な表現力を身につけるための授業実践として実施された、様々な媒体による表現方法を統合した総合的表現活動を通して、学生は何を学んだか、またその活動過程の中で学生は表現力を身につけることができたのかについて、学生へのアンケート調査を通して明らかにする。

対象は、保育者を志す4年制T大学2年生50名である。1年次から2年次にかけて学ぶ保育表現技術での学びを相互に関連づけるための総合的表現活動の実践として、2年前期の終わりにシアター発表会を実施し(平成28年度は7月

9日に実施した), 発表会を終えた後, 事後アンケート調査を実施した。本研究では, このアンケート調査の結果を分析することから, 総合的表現活動を通して学生は何を学んだか, また学生の表現力はどのように身についたのか, その学びの過程の実際を明らかにする。

アンケート調査は次の2つを実施した。調査1はシアター発表会に関する各質問項目について, よくあてはまる(4点), まあまああてはまる(3点), あまりあてはまらない(2点), 全くあてはまらない(1点)の4件法での回答を求める選択式のもので, 調査2は「シアター発表会を通して何を学んだか」及び, 「子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助」について自由記述で回答するものである。調査1の4件法で回答するアンケートは, 発表会終了直後の7月9日に無記名で実施した。質問項目は, 「シアター発表会を楽しく感じたか」, 「楽しかった具体的な理由」, 「準備への参加状況」, 「グループ活動について」, 「活動を振り返って」, 「作品について」, 「将来保育者としてこの発表が生かされるか」, 「シアター発表の前後での自身の表現力について」等についての17項目であるが, 本研究では目的に照らし合わせこの中から9項目の調査結果について検討する。

調査2の「シアター発表会を通して何を学んだか」及び, 「子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助」に関する自由記述での回答は, 発表会での経験を振り返り自己の成長過程を省察する時間が必要であると考え, 発表会終了約1か月後の8月5日を提出期限とし, 有記名で実施した。類似する記述内容をKJ法によって分類しカテゴリー化をして分析を行った。

調査1, 2のいずれも回収率は100%であった。

III 活動の実施方法

この総合的表現活動は平成28年度2年次前期に開講されている「保育内容表現」の授業の一部を使用して行った。また, 「保育内容言葉」の授業においても領域言葉に関わる内容として台本作成等を行った。

対象学生らが6グループ(1グループ6~9名程度)に分かれ, 人形劇, 影絵, ブラックライトシアター, 劇, 音楽劇などの表現方法を用いたシアターを製作し, 同大学1年生の前で演じるシアター発表会を開催するという形式で行われた。グループ分けは学生たちの希望により自由にグループを作り, 表現方法も題材もグループ内での話し合いにより決定した。題材に関しては, 昔から親しまれている童話や保育現場で一般的によく読まれている絵本などから選ぶよう指定した。選んだ題材のどのような点が子どもたちに親しまれているのか, その題材の魅力は何か, それを演じる場合, 最も適した表現媒体や方法はどのようなものかを考えることも, 保育実践における教材研究として重要であると考えたからである。台本, 衣装, 背景やセット, 小道具も全て学生たちで作成し, 音楽や効果音なども話し合いながら考えていった。

発表準備や練習については学生らがグループ内で計画を立て, 空きコマ等を利用して自主的に行った。授業者は学生たちから相談があった場合には一緒に考え, 助言を行うが, 製作・練習の進め方については学生たちの主体性に任せることとした。活動開始当初はグループによって進度が異なり, なかなか計画通りに進められないグループもあったが, 本番の約2か月前ごろになると, 徐々に台本や衣装, 道具づくり, 音楽づくりなど, 積極的に活動するグルー

ブが目立ち始めた。

立ち稽古は「保育内容表現」の授業4コマを利用して行ったが、シラバスに示される授業計画と関連づけるため、音楽、造形、身体、言葉のそれぞれの保育表現技術を総合的にいかすという視点をもった実践事例としての総合的表現活動であることを学生たちに意識づけするよう心がけた。授業者は学生たちが十分に話し合ったり考えを出し合ったり、製作をしたりすることができる時間的・空間的・物理的環境を用意しながらも、可能な限り学生たちの主体的・創造的・協同的に取り組む態度を尊重するようにした。授業者としては、学生の考えが行き詰った時、迷った時などの対話者としての存在であることや、学生たちだけで克服できない課題にぶつかった時の足場の役割になることを心がけた。立ち稽古では、相互の発表を見合い、意見を出し合うようにした。自分の参加するグループだけでなく、他のグループの製作や練習過程をみることにより、より多くの作品について、見る側（子ども）の立場になって、良い点、分かりづらい点、改善点などを考えることが可能となった。同時に、保育現場において「子どもが演じる」ことを前提とした場合の指導方法についても検討させるようにした。このことにより、どのグループの作品も学生一人一人が「その作品づくりに関わっている」という意識をもつことや保育実践を意識することをねらいとすることができた。

IV 結果と考察

1. 調査1：選択式アンケート調査の結果

この調査は、「Ⅲ 活動の実施方法」で示した過程を経て2016年7月9日に開催したシア

ター発表会を終えた後に実施した。選択式アンケート調査では、シアター発表会に関する17の質問項目について、よくあてはまる(4点)、まあまああてはまる(3点)、あまりあてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)の4件法で回答を求めた。本研究ではこれら17項目のうち、研究目的に沿って、「シアター発表会を楽しく感じたか」、「楽しかった具体的な理由」、「シアター発表会に向けた自身の取り組み度」、「取り組みに影響した要因」、「活動を通して学んだこと」、「シアター発表の経験は保育者として役立つか」、「具体的にどのようなことに役立つか」、「子ども自身が表現する上でどのような経験が大切だと思うか」、「シアター発表の前後での自身の表現力の変容」の9項目についての結果について検討する。

(1) シアター発表会を楽しく感じたか

この質問はアンケートの1番目の項目とした。「よくあてはまる」(4点)から「まったくあてはまらない」(1点)まで回答を求めた結果、その平均は3.86であった。

また、「楽しかった具体的な理由」として4項目を同様に4件法での回答を求め、さらにその他として自由記述での回答を求めた。その結果は図1の通りであるが、それぞれの質問項目の平均は、①「人前で発表したこと」3.54、②「仲

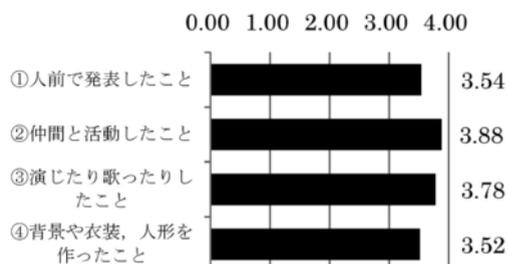


図1 楽しかったことの具体的な理由

間と活動したこと」3.88, ③「演じたり歌ったりしたこと」3.78, ④「背景や衣装, 人形を作ったこと」3.52であった。また, ⑤その他の回答はなかった。

シアター発表会は保育・教育コースの1年生に披露する目的で実施されているが, 当日は1年生だけでなく同級生である2年生の教員養成コースの学生, 過去に発表会を経験した上級生, そして教員も鑑賞した。多くの観客から拍手をもらい, 演じ切ったという達成感や高揚感が冷めない中で調査を行っていることが高得点に繋がったと考えられるが, 楽しいと感じたことの具体的な内容を問う各項目では, 特に「仲間と活動したこと」が最も高かった。このことから, 演習科目の特徴のひとつであるグループワークが有効に機能したことや, 「I はじめに」で述べたように「他者に伝える力」や「他者と関わる力」を身につける方法としての表現活動の有効性が明らかになったといえる。

(2) シアター発表会に向けた自身の取り組み度

自身がシアター発表に向けてどの程度取り組めたかを4件法で回答を求めたこの項目の結果の平均は3.76であった。また, 「取り組みに影響した要因」については図2のとおり, ①「自分の気持ち」3.62, ②「メンバーとの関係」3.60, ③「授業だから」2.36という結果になった。

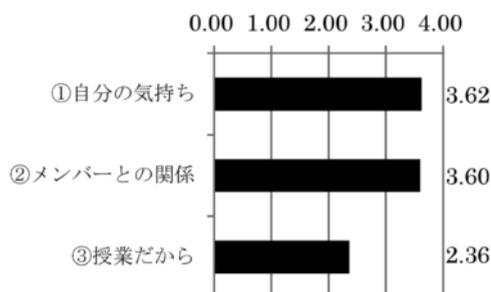


図2 取り組みに影響した要因

①「自分の気持ち」の結果は, シアター発表会に向けての取り組み度の結果と照らし合わせても, 学生が自ら主体的にこの活動に参画していたことがわかる。また, ②「メンバーとの関係」では, 「自分だけがさぼるわけにはいかない」という気持ちや, 「仲間と一緒に作り上げたい」という気持ちが大きく影響していると思われる。

保育現場では多くが複数担任制となっていることから保育者同士の連携は欠かせない。また年間を通して多くの行事が行われており, そこでも同僚と互いに意見を言い合い協力しながら仕事をする必要があり同僚性が求められる。シアター発表会の準備に向けてメンバー同士の良好な関係を保ちたいという意識が, 活動への取り組みに影響していると学生自身が自覚的にとらえられることは, 今後保育者となったときにもこのことを自覚しながら仕事に臨むことができることを示唆している。

③「授業だから」という項目は「授業だから仕方なく取り組んだ」という意味で設定した。他の2つより低くなっていることから, 学生たちはこの活動に主体的に積極的に取り組んでいたことがうかがえる。しかし, この項目を選んだ学生は必ずしも「授業だから仕方なく」ではなく, 「授業だからこそ学べることもある」という意味で選択していた可能性も否定できない。回答項目の記述方法の曖昧さから学生の真意を十分理解しきれない結果となった。学生が主体的に積極的に取り組むことの要因として授業という枠組みの中でこそ得られる学びがあるということも授業者として十分意識して取り組まねばならないことであると考えられる。

(3) 活動を通して学んだこと

「シアター発表の活動を通して学んだこと」については、自由記述でも回答を求めているがその結果については後述する。ここでは筆者らが設定した6項目について「よくあてはまる」(4点)から「まったくあてはまらない」(1点)までの4件法で回答を求めた結果について述べる。各項目の平均は図3の通りである。

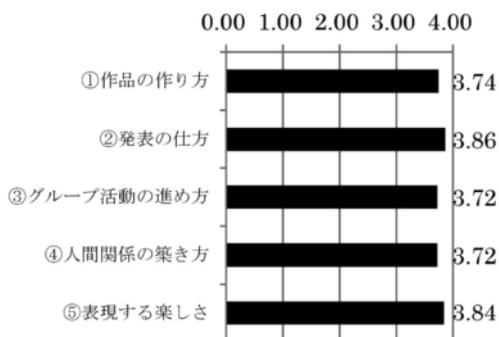


図3 活動を通して学んだこと

①「作品の作り方」3.74, ②「発表の仕方」3.86, ③「グループ活動の進め方」3.72, ④「人間関係の築き方」3.72, ⑤「表現する楽しさ」3.84と、どの項目も高得点という結果となっている。

これら5つの質問項目は授業者らが総合的表現活動を通して習得してほしいと考えていることである。①, ②は保育表現技術の習得を, ③, ④は表現活動を通して身につけてほしい保育者としての基本的な資質の習得を, そして⑤については表現活動の本来の意義であり, 保育者として子ども達に伝えていってもらいたいことである。このようにどの項目も高得点という結果を得られたことは, この活動のねらいが達成されたということを示している。

(4) シアター発表の経験は保育者として役立つか

この質問では, まず「役立つかどうか」について4件法での回答を求めたところ, その平均は3.98ととても高い得点という結果となった。また, 「どのようなことに役立つか」について, 筆者らが設定した4つの具体的なことに関する項目の結果は図4の通りである。

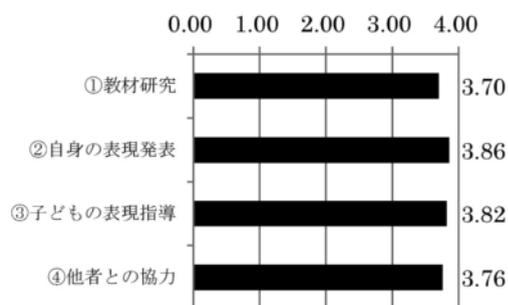


図4 シアター発表の経験が保育者として役立つ具体的なこと

①「教材研究」3.70, ②「自身の表現発表」3.86, ③「子どもの表現指導」3.82, ④「他者との協力」3.76という結果となったが, これらの質問項目も, 授業者として筆者らが総合的表現活動を通して学生たちに身につけてほしいと考えていることである。

幼児期の教育は遊びを通しての指導が基本であるが, その遊びも子どもに何が育ってほしいかと考え, その時々のおねらいに沿って子どもの学びに繋がるよう保育者が環境を整える必要がある。その際に, その遊びの面白さは何か, どのように環境を整え準備するのかといったことを考えながら教材研究を十分に行う力が必要となる。シアター発表会の準備過程では, 必要な道具を作る, どのような言葉を用いれば子どもに伝わるか, どのように演じればよいか, その題材の本来のテーマは何か, どこに面白さや良

さがあるか、それを引き出すためにはどのような表現媒体が適しているか、どのように演じればよいか、効果音や背景はどのように設定すべきか等、ひとつの作品を作る過程において保育に関する多くの視点から作品を考えていかなければならない。これらの過程すべてが保育において教材研究を行う基礎となるのである。

また、保育においては様々な行事において保育者自身が演じ手となって子ども達の前でシアター発表を行う機会があり、同時に子ども達自身が演じ手となって行事等で発表を行う機会がある。保育者自身が演じる場合も子どもの表現指導を行うにあたって、保育者は子どもの立場に立って「見る側」と「演じる側」の心情を理解しておく必要がある。保育者養成における総合的表現活動の実践は、単に学生が楽しむことや表現力を身につけるためだけに行うのではなく、保育者としての実践力を身につけることもねらいとしているが、この結果からこのねらいも概ね達成されたといえる。

(5) 子ども自身が表現する上でどのような経験が大切だと思うか

この質問は、さらに保育実践を見すえ、保育において子どもの表現活動を行う場合、子どもにはその活動を通してどのようなことを経験してほしいかということについて以下の5項目について4件法で回答を求めた。その結果は図5のとおりである。

①「人前で発表する経験」3.86, ②「ひとつのものを作り上げていく経験」3.98, ③「ひとつのものを完成させること」3.94, ④「仲間と協力する経験」4.00, ⑤「表現する楽しさの経験」3.98と、どの項目も満点またはそれに近い高得点となった。この結果は、シアター発表会を経て学

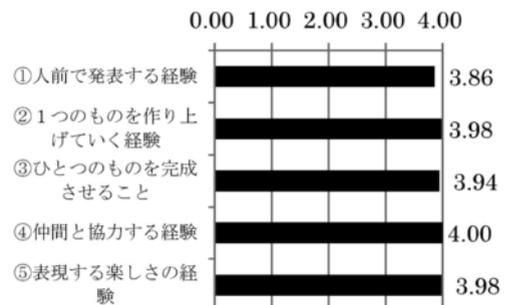


図5 子ども自身が表現する上で必要な経験

生自らがこれらのことを実感していることの証であろう。すなわち、学生たちは総合的表現活動の実践を通して、子どもが表現活動を行う際に必要な経験や学びのプロセスを、学生たち自身が辿ることとなった。それは岡本(2007)が、「保育者養成においては指導者である保育者としての立場と学び手である子どもの立場と、両方の立場を学生自身が自覚的にとらえながら学ぶことが求められる」⁹⁾と述べるとおり、保育者養成のあり方の本質を示しており、これらの結果は学生たちがそのことを自覚的にとらえて学んでいることを示しているといえる。

(6) シアター発表前後での自身の表現力の変容

ここではシアター発表会の練習を始める前と発表会を終えた後の学生自身の表現力を1点～4点で自己評価してもらった結果について述べる。評価前後の各平均は図6の通りであり、前と後とで何ポイントアップしたかを示したものが図7である。

図6に示したように、①「シアター発表の練習を始める前」の自身の表現力についての平均は2.16であったのが、②「シアター発表会終了後」は3.32となっており、1.16ポイントアップしている。

また、何ポイントアップしたかについては、

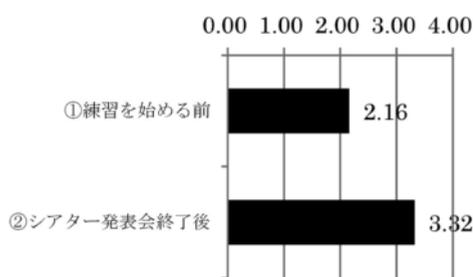


図6 シアター発表の前後での自身の表現力の変容

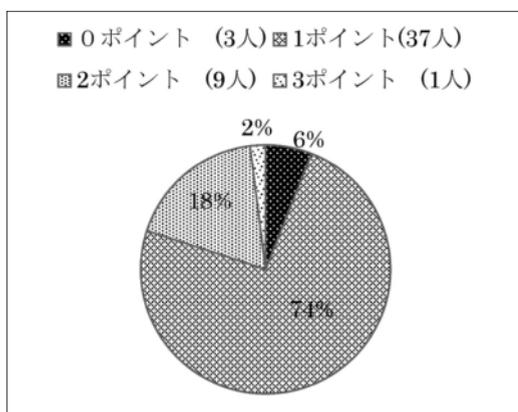


図7 シアター発表前後の表現力アップポイント

1ポイントが37人と最も多く全体の74%を占めている。続いて2ポイント9人(18%)、3ポイント1人(2%)だが、0ポイント(変化なし)も3人(6%)いた。

これらの結果から、シアター発表会を経験して多くの学生が、自身の表現力は向上したと考えていることがわかる。表現力がどの程度身についたかということを数値化して表すことは難しいが、自己評価で多くの学生が向上したと評価していることは、この活動を通して表現することに対して自信がもてるようになったととらえることができる。

1年次の保育表現技術の授業では人前で発表したり歌ったり演奏したりすることに多くの学生が恥ずかしさを感じ、十分に表現することが

できなかった。また2年生のシアター発表をみた後の1年次の感想でも、多くの学生が「来年、自分たちが先輩方と同じように演じるようになる自信はない」と感想で述べていたが、1年経って練習を重ねたり仲間と協力したりする経験を積み重ね、信頼できる仲間や安心して十分に自己を発揮することができる環境が整うことで、表現することへの戸惑いが軽減され、それが自信へと繋がっていったと思われる。

2. 調査2：自由記述式調査の結果

この調査は、発表会での経験を振り返り自己の成長過程を省察する時間が必要であると考え、発表会終了約1か月後の8月5日を提出期限とし、有記名で実施した。質問項目は、「シアター発表会を通して何を学んだか」及び、「子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助」に関するもので、自由記述での回答を求めた。得られた回答は、類似する記述内容をKJ法によって分類し、「シアター発表会を通して何を学んだか」については3階層のカテゴリー化を、「子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助」については2階層でのカテゴリー化を行った。

(1) シアター発表会を通して何を学んだか

調査1では、筆者らが設定した「作品の作り方」、「発表の仕方」、「グループ活動の進め方」、「人間関係の築き方」、「表現する楽しさ」の5項目について、自分がどの程度身につけられたかを4段階で評価させたが、それぞれ高得点であった。調査2では同様に学んだことについて自由記述での回答を求めたところ、それぞれの学生が様々なことを学んでいたことが明らかとなった。学生の回答を3階層でカテゴリー化を



図8 シアター発表会を通して何を学んだか

行ったが、1人の学生が複数の学びについて言及している。最も多い学生で7種類の記述内容があり、少ないもので2種類であった。

図8に示す通り、まず第1層では3つに分類することができた。【グループ活動に関すること】42人、【発表内容・方法に関すること】37人、【自分自身に関すること】30人という結果が得られた。

【グループ活動に関すること】では、「自分の意見を相手に伝える」、「他者の意見を聞く」、「気持ちを理解しようとする」など、『言葉で伝えあうことの必要性』が31、「協力する喜びを味わう、一体感をもつ」、「自分もメンバーの一員であることの自覚をもつ」、「積極的に参加する」など、『人との関わりの大切さ』を学んだという

回答が36であった。

【発表内容・方法に関すること】は、「子どもの目線に立つ」ことや「発達を考慮すること」など『子ども理解に繋がる』ことを学んだという意見が29、「多様な表現の仕方のあること」、「環境設定の重要性」、「様々な視点から作品を見直す」、「台本や音楽づくり」、そして「作品のテーマを理解する」など、『教材研究の必要性』を学んだという意見が28、また、「時間を有効に利用する」や「計画を立てる」など『計画・準備を行うことの必要性』が30であった。またわずか1名であったが、『5領域を総合的に見る視点を学んだ』という意見もあった。

そして【自分自身に関すること】では、「拍手をもらった時の喜び」や「やり終えたことの達

成感、充実感」など、『達成感、充実感をもつことの喜び』が25, 1年次に学んだ保育表現技術の技法をいかした『表現力の向上』が9, 『表現する楽しさ』を学んだという意見が20, そして「試行錯誤する」ことや「最後まで諦めないで、よいと思うまで何度も繰り返しやり直すこと」など、『諦めないことの大切さ』を学んだという意見も3名あった。

以上、自由記述の回答から学生が総合的表現活動を通して何を学んだかを検討してきたが、調査1の結果をあわせて考えてみても、総合的表現活動を行う上で仲間の存在の必要性を強く実感したことが【グループ活動に関すること】の記述の多さからうかがえる。学生が主体的・創造的・協同的に取り組む総合的表現活動では、避けて通ることのできない「人との関わり」における複雑な感情体験を様々にすることとなる。自分自身の経験する感情を客観的に受け止め、分析し、正直な自分の気持ちを相手に伝えること、また相手の言うことも冷静に判断しながら受け止めること、このような「伝え合い理解しあう力」を身につける機会として、総合的表現活動は有意義に機能を果たしているといえる。

また、【発表内容・方法に関すること】に分類された項目をみると、これらが直接的に自らの保育実践に繋がるということが自覚的にとらえられているということができよう。この点については、(2)の「子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助」についての回答と合わせて検討する。

【自分自身に関すること】は他の2つのカテゴリーと比べても回答が少なかったが、特に「表現力の向上」について述べている学生が9名にとどまっていた。調査1の結果とあわせてみても、学生自身の技能としての「表現力」そのもの

のが向上したという意識はそれほど高くないことがうかがえる。しかし約半数の学生が表現することの楽しさや、やり終えた後の達成感や充実感を味わうことができている。この結果に関して、今後授業担当者としては授業改善の工夫が必要であると考えられる。学生が楽しさや達成感、充実感を味わうことが、表現することの自信になり、ひいてはそのことが表現力の向上に繋がるといったことを自覚的・意識的に学べるよう授業を進める必要があるだろう。

(2) 子どもの表現を理解し育てるための保育者の援助

この質問項目への回答は、2階層のカテゴリー化を行った。その結果、図9のとおり、『環境構成の工夫』、『子どもへの直接的援助』、『保育表現技術の向上』の3つに分類することができた。

まず、『環境構成の工夫』では、「表現するための様々な表現媒体や環境を整える」36人、「日常的に心が動く経験ができるようにする」20人という回答が得られた。保育における環境の重要性は他の教科目においても繰り返し学んでいるが、1年次に数日間の幼稚園実習を行った経験しかない2年生にとって、このことの重要性を頭で理解するだけでなく、実践を通して知る貴重な機会になっているといえる。また、発達に必要な経験を積み重ねることで子どもは成長していくとする幼児期の教育においては、心動かされる様々な経験ができるよう環境を整えていく必要がある。「感じ取る」→「感じたことを表現する」→「表現したことからさらに感じ取る」といった表現の循環が起ることによって子どもの感じる力、表現する力が育つことを考えると、その経験の積み重ねのために十分考えられた環

環境構成の工夫	表現するための様々な表現媒体や環境を整える。 36
	日常的に心が動く経験ができるようにする。 20
子どもへの直接的援助	子どもの表現しようとする意欲を認める。 34
	一人一人の表現や主体性を認める。個性を認める。 29
	子どもが何に楽しさを感じているかを知る。 31
	仲間と協力する楽しさや、一体感を感じられるようにする。 25
	表現する楽しさを伝える。 17
	子どもが表現することで、達成感、充実感、自己肯定感をもてるようにする。 6
保育表現技術の向上	保育者自身が様々な表現方法、表現技術を習得する。 16
	保育者自身が表現することを楽しむ。 8

図9 子どもへの表現を理解し育てるための保育者の援助

境を整える必要があるのである。シアター発表会の準備と練習を重ねて発表に至るまでの過程を経て、学生たちがこのことを実感できたことの意義は大きい。

また、『子どもへの直接的援助』に分類される回答は多く得られた。「子どもの表現しようとする意欲を認める」34人、「一人一人の表現や主体性を認める、個性を認める」29人、「子どもが何に楽しさを感じているかを知る」31人、「仲間と協力する楽しさや、一体感を感じられるようにする」25人、「表現する楽しさを伝える」17人、「子どもが表現することで、達成感、充実感、自己肯定感をもてるようにする」6人であった。

これらの回答をみると、筆者らが総合的表現活動を通して学生に学んでほしいと考えている

こと、この活動のそもそものねらいと一致している。また、先にも述べた「何を学んだか」の回答とも通じている。調査1の考察でも述べたが、学生たちは表現活動を通して学び手として感じ取り学んだことをまた、子ども自身にも学んでほしいと考えていることが分かる。このことが保育者養成における学生の学びにおいては、学生が学び手である子どもの側と指導者側の2つの立場を重ね合わせながら学ぶことが必要であるとされる所以である。

そして3つ目に分類された『保育表現技術の向上』は、子どもの表現を理解し育てるために必要な保育者の力量として、自分自身が保育表現技術を磨く必要があるとした回答である。シアター発表等で演じるだけでなく、絵本を読ん

だりピアノを弾いたり歌を歌ったり楽器を演奏したり、あるいは絵を描いたりモノを作ったりといった保育の中で日常的に行われる保育者の保育行為の中に多くの保育技術を要することがあるということである。絵本では読み方の工夫だけでなく、季節、その日の子どもの心情などを考慮しながら絵本を選ぶ。その時にどのような絵本があって何を選べばよいかということを知っていなければならない。それは音楽活動も造形活動も同様である。また、子どもが経験したことを表現するために、どのような媒体を用いることが適切かを判断するためには、多様な表現媒体、方法があること、その表現技術を有していることが必要である。保育者自身も持っている表現技術の多様さによって子どもの表現できることの多様さもまた変わってくることを学生たちは学んだのである。

そしてわずか8名の学生ではあるが、子どもの表現を育てるためには、まず自分自身が表現することを楽しむ必要があると回答している。

調査1において「シアター発表会は楽しかったか」という質問において43名の学生が4段階評価のうちの4点をつけているという結果からみると、この回答は少ないように感じる。表現することの根源的な意味としての「表現する楽しさ」を自らの体験では実感していても、「自ら楽しむ」ことが子どもの表現活動において必要なことであると結びつけてとらえることが難しいということの表れであると思われる。

V おわりに

本研究では、保育者養成課程における各保育表現技術での学びを相互に関連づけ、保育者に必要な表現力を身につけるための授業実践とし

て実施された、様々な媒体による表現方法を統合した総合的表現活動を通して、学生は何を学んだか、その学びの過程の実際を、学生への選択式と自由記述式によるアンケート調査の結果を分析することから明らかにした。

その結果、次のことが明らかになった。

- 1) 学生は総合的表現活動を通して「表現することの楽しさ」を知り、その実感から子どもの表現活動においても、「表現することの楽しさ」や「仲間と協力することの大切さ」を子どもに伝えたいと感じていた。この結果は、学生が自身の「表現する力」を高めたいという動機づけになり、今後の表現活動の学習に対しても主体的に取り組む意欲に繋がるといえる。
- 2) グループワークの過程で、多くの学生が仲間と協力することの大切さや人との関わり大切さを実感することができた。学生自身の協同学習の経験は、保育における子どもの協同的な学びを可能にするために、どのような環境を保育者は用意する必要があるかを実践的に考える機会となった。
- 3) 作品作りや発表の機会を得ることで、題材に向き合うこと、どのように作るか、どのように演出するか、どのように表現するかを考えることは、保育実践における計画を立てることや教材研究をすることの重要性を知る機会となった。
- 4) グループワークを行う上で経験した葛藤や協同することの大切さや困難さは、「自分自身の意見を言う」と同時に、「相手の意見も聞く、理解する」という、言葉で伝えあうことや相互関係の重要性にも気づくことへと繋がった。

これらを総合すると、総合的表現活動におけ

る学生の学びは、単に表現技術や方法の習得にとどまらず、人と関わることの重要性に気づくことや、保育者に必要な保育実践や援助の具体的な方法を知ること、そして活動を通して様々な困難や葛藤を経験しながらも、仲間とともに協力しながら乗り越えていくことの達成感や充実感、その大切さへの気づきにまで及んでいることがわかる。さらに、その過程でこれまで自分自身も経験しないような、より複雑な感情を体験することにより、相手の立場に立って理解することは困難であり、相互理解のためには「言葉で伝えあう」ことの必要性、それを可能にするだけの表現力が必要であることも学ぶことができたであろう。

それでもなお、保育においても子どもには「仲間と協力すること」や「表現する楽しさ」を経験してほしいと思うのは、それが自分自身の人間的な成長に必要な経験であることを知ることができたからであると思われる。

最後に、「表現する力」を身につけていく過程では、他者の存在が大きく影響を及ぼしていることも明らかになった。他者（友だち）の存在は、自身が大きな困難や葛藤を抱える要因であるとともに、そのような存在であるからこそ、

互いに理解しあい、思いを伝えあうための表現方法を身につける動機づけになり、支え合い協力しあえた時には、同じ経験、感動を共有し達成感を味わえる仲間として存在する。このような学生相互の学び合う関係の場を構築し、学生の主体的・創造的・協同的な学びを可能にする活動として、総合的表現活動は大きな役割を果たしているといえる。

参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会. OECDにおける「キー・コンピテンシー」について. 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」。2008. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/05111603/004.htm (参照 2016-09-08)
- 2) 時得紀子. 総合表現型カリキュラムの実践への一考察. 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集. 2010, (11), p.155.
- 3) 岡本拓子. 保育者養成校における力量形成としての表現の授業. 保育学研究. 2013, 51(3), p.165-169.
- 4) 厚生労働省. 保育士養成課程の改正内容について. 第4回保育士養成課程等検討会資料3. 2010. p.3.
- 5) 岡本拓子. 実践のための実践—保育者養成における「学び」. 西條剛央他編. エマージェンシ人間科学理論・方法・実践とその間から. 北大路書房, 2007, p. 78-87, ISBN978-4-7628-2536-1.